

附属図書館

一 草創期

東京外国語大学附属図書館は、その歴史を東京外国語学校の東京商業学校からの独立に遡ることができるが、沿革をまとめるにあたり、まず一八七三（明治六）年に開校した東京外国語学校（いわゆる旧外語）時代の事情について整理しておく必要がある。

『文部省第二年報』によれば、一八七四（明治七）年の書籍現数は、仏独魯語書五、二六四部、国書・漢書・訳書九三六部、計六、二〇〇部で、また同年中の購入分は外国書七七七部となっており、合計で六、九九七部の書籍を有していた。

また、『東京外国語学校一覽（明治十二年十月）』には「書器局規則」一二条が記載されており、利用上の手続きが定められている。さらに、教員職員の一覽の中に、国書教員・書器取締兼務永井當昌および職員・書器佐久間正節の名がみられ、この段階で一定の図書室機能を有していたと推測される。

ただ、利用の手続きは現在の一般的な利用規程に比べればかなり複雑で、例えば学生の場合書記局の承認と受持ち教員の検印の両方が必要であるとか、教員の場合でも授業ではなく自分の参考用に利用する場合は学校長の検印が必

要であると規定されている。

さて、旧外語は一八八五（明治十八）年九月に商法講習所と合併して東京商業学校となり一旦姿を消した後、高等商業学校附属外国語学校を経て、一八九九（明治三十二）年東京外国語学校として独立することになる。この新しい東京外国語学校に図書館の名が現れるのは一九〇三（明治三十六）年十一月刊の『東京外国語学校一覽（従明治三十六年至明治三十七年）』でのことである。

この年一月、従来の校舎から隣接する神田区錦町三丁目の新築校舎に移転し、旧校舎は分教場として使用することになったが、その際本校舎一階の一角に図書閲覧所が設置された。また同年五月には二八条からなる「東京外国語学校図書館規則」が制定され、図書館主事吉田義静および図書掛二名（うち一名は兼務）が配置されている。

ここで制定された規則は、旧外語時代の規則に比べるとかなり整備されたものであり、貸出冊数・閲覧冊数（ともに五冊以内）や閲覧票（入館許可証に相当）の書式、夏期休業中の利用規程まで細かく定められている。また、条文から、閲覧室と書庫とに分かれ一部を除き図書は書庫に収められ入庫には別に手続きが必要ないわゆる閉架方式であったことが読みとれるが、閲覧室と書庫の位置関係については建物の略図にも特に示されていないので不明である。

この当時にも、図書は一定の分類が施されていたと推測されるが、蔵書に関する記録は一九一三（大正二）年以後のものしか残されておらず、同様の分類を行っていたか別の分類であったかの正確なことは不明である。ただ、現在もごくわずかながら、記録にはない体系不明の分類を施した図書が残っていること、現存する図書原簿の中に後述の類焼を免れた図書の分類を変更したと思われる記述があり、それらがこの時期の分類体系であった可能性が高い。

二 再建と充実期

さて、一九一三（大正二）年二月二十日の神田火災の類焼により校舎全部を焼失した際に図書館の蔵書も大きな損失を被った。これ以前の東京外国語学校蔵書に関する詳細な記録は現存しておらず、この火災の折に多数の蔵書とともに記録も失われてしまった可能性が高い。このときの焼失分については、これ以後の受入図書を記録した言語別図書原簿それぞれの第一ページに記載されているが、それらを集計すると三、六一四冊を焼失しており、全体の六割弱にのぼる。細部を検討すると記載に若干の不備、矛盾もあり誤差はあると思われるが、「但し重要書類の殆んど全部と図書約半数とは幸にして搬出するを得たり」（『校内彙報』「『西語語同学会誌』第五号、一九一三年十一月）とあるように、半数程度は焼失を免れたと思われる。ただ、和漢書については特に被害が大きく、二、八〇〇冊余りの内残ったのは七八五冊で、その内和書は一〇〇冊にも満たなかった。

しかし、この大きな痛手からの立ち直りは早く、同年九月に同じ敷地内に仮校舎を新築したが、「東京外国語学校一覽（従大正二年至大正三年）」によれば、その際には西北端に閲覧室、それと廊下で結ばれた独立の書庫が再建されている。

さらに、蔵書に関しては、焼失の翌年度に大量の図書を受入れ、被災からほぼ一年後の一九一四（大正三）年三月末には総冊数八、五一三冊と被災前の所蔵冊数をすでに上回っている。一九一四（大正三）年度一年間の受入冊数は五、五〇〇冊に上り、翌年度以降数年間の年間受け入れ冊数の一〇倍になっている。これらの内には、一部日仏協会等からの寄贈によるものもあるが、大半は書店からの購入であり、特に一九一四年三月二十五日に集中している。た

だ、この前後の予算については文部省年報を見ても特に經常費が増加したり臨時費が配分された形跡はなく、どのようにして短期間に蔵書を再構築したかは明らかでないが、ともあれ約一年で蔵書構成上もほぼ再建されたといえる。

その後も蔵書数は順調に増え続け、一九二一（大正十）年に麴町区元衛町一番地に新校舎を建築、移転したときには、蔵書冊数は一二、〇六九冊にまで達していた。この校舎においては、図書館は敷地の一角に、標本室兼図書閲覧室並書庫兼図書課として鉄筋コンクリート・ブロック併用造二階建、延面積約七九〇平方メートルの独立棟を持つことになった。また、それと前後して一九一九（大正八）年の学則制定に伴い図書課が置かれ、図書課長（教授兼任）吉岡源一郎および課員四名の事務組織に成長している。このとき、図書館規則も学則の細則として整備され、二五条に再編成されている。

この時期の分類体系は外語独自のものです、記述言語を示す記号、主題を表す数字と受入順の一連番号で構成されている。記述言語の記号は、英語はE、ドイツ語はD、フランス語はFというように主要一四言語について定め、それ以外はMisとしてまとめている。

主要一四言語については、さらに主題によって、Iは辞書事典類、IIは言語、IIIは文学というようにXの報告・年鑑等まで一〇区分されている。また、Misでまとめられた言語はその下位区分として、それぞれの記述言語を示す記号（ラテン語であればLat）を付け、主題分類は行っていない。

この分類体系がいつから用いられたか正確にはわからないが、図書原簿を調べると一九一七（大正六）年の途中からこの体系で受入図書の分類番号が記載されており、それ以前のを訂正した跡があることから、おおよそこの時期であろうと推測される。ただ、この体系とそれ以前のものと思われるものが共存している時期があり、日付の特定までは難しい。なお、この分類体系は一九六一（昭和三十六）年三月まで残り、最終的に九八、一九九冊の図書の

分類に使われた。これらの図書は、「旧分類図書」として現在でもそのまま書庫に保存され利用に供されている。また、検索用の目録カードについても、分類目録および、和漢書においては書名目録、その他の言語では著者名目録が編成されている。

一九二三（大正十二）年九月の関東大震災では外語もほぼ全焼したが、幸いにも書庫は類焼を免れたので、図書館にとつては前回の火災よりも被害は小さかった。それでも、貸出あるいは別置のためか、中国語図書八一〇冊、スペイン語図書二四七冊など合計一、五九三冊（全体の八パーセント）の図書を失っている。なお、翌年三月麴町区竹平町一番地の新築仮校舎に移転した際に、図書館も閲覧室・事務室四〇六平方メートル、書庫延一六八平方メートルの規模で再建されている。

ところで、一九一九（大正八）年四月に学校長に任じられた長屋順耳は、この大震災を契機に外国の書籍、外国文化紹介に関する文献の収集・保存の必要を痛感し、明治維新前後を中心として積極的な図書の収集を行った。そして、その成果を一九二九（昭和四）年十月に「外国語研究図書展覧会」として公開している。この展覧会には、長屋が収集した三三〇部、五七〇冊の図書に、各方面の蔵書家の所有する図書を合わせ、総計四六一部、七二一冊が出品されており、その内容は「維新前後外国語図書目録」（一九三〇年十一月）にまとめられている。また、翌一九三〇（昭和五）年には静岡県立葵文庫より六六本の寄贈を受けており、これらを基礎にその後収集したものを含め現在の本学図書館の貴重書コレクション一、二六二冊が形成されている。

これ以後、組織・規定等にも変更はなく、一九四四（昭和十九）年に東京外事専門学校となって滝野川（現北）区西ヶ原町に移転する際には、蔵書数は六三、〇〇〇冊余にまで増えている。ただし、西ヶ原への移転の際に図書館書庫のみは竹平町旧校舎の場所に残った。一九四五（昭和二十）年四月の戦災で門衛所等を除き校舎が全焼した際にも、

竹平町の書庫は消失を免れ、その後一九五四（昭和二十九）年まで使用されていた。それでも、図書原簿によれば、このときの戦災で和書一、八一九冊をはじめ総計四、〇五三冊（全蔵書の約六パーセント強）の西ヶ原校舎にあったと思われる図書を失っている。同時に、目録も焼失している。

西ヶ原校舎焼失後、一時東京美術学校・図書館講習所・美術研究所内に移転し授業を行い、翌一九四六（昭和二十一年）年には板橋区上石神井の智山中学校校舎等を借用し移転した。智山中学校の校舎では講堂を閲覧室・事務室として利用し、図書館業務を行った。

三 再出発と発展期

一九四九（昭和二十四）年五月に国立学校設置法により東京外国語大学が東京外事専門学校を包括して設置され、同年六月分課規程の制定により附属図書館が置かれた。さらに七月には笠井鎮夫教官が初代図書館長に補せられ、九月には図書館協議会が設置されて、東京外国語大学附属図書館がスタートする。

その後、一九五一（昭和二十六）年には上石神井地区から西ヶ原地区へ校舎の全面移転が行われたが、この移転当初には閲覧室・書庫等はなく、木造校舎の一室に仮の図書館事務室が設けられた。一九五二（昭和二十七）年、鉄筋コンクリート造校舎（現在の一号館北側部分）を新築した際に、一三〇一教室に図書閲覧室・事務室を置いた。さらに、校舎の増築に伴い、一九五四（昭和二十九）年三月に図書館として閲覧室・書庫（四層）・図書貸出カタログ室・製本印刷室・事務室が整備され、翌一九五五（昭和三十）年一月に閲覧室等を拡充した。これにより、書庫、閲覧室、標本室、図書館長室、事務室等合わせて一、五三四平方メートルの施設となった。また、「東京外国語大学要

覧」(一九五五年四月)によれば、事務組織は、図書館長、事務長および司書係長と一〇名の係員で構成されている。

書庫新築までの間、一九五一(昭和二十六)年四月から二年間は、豊島区西巢鴨の大正大学の校舎を一部借用し書庫として使用しており、教官・学生がこの書庫の図書を利用する際には、係員が希望に応じて毎日午前午後二回大正大学まで取りにゆくという不便な状況にあった。また、同時に戦前からの竹平町の書庫も引き続き使用していたが、書庫新築後八月までの間に竹平町の書庫から蔵書を順次移転し、ここでようやく西ヶ原校舎での図書館機能が整うことになった。また、こうした図書館施設・組織の整備と期を同じくして蔵書数も増加し始め、一九五四(昭和二十九)年には七万五千冊の蔵書を持つに至っている。

この時期の図書館は閉架式で運用され、一部の辞書・辞典類を除き図書は書庫に収蔵されており、利用者の求めに応じて館員が書庫より出納し閲覧・貸出を行っていた。一九五五(昭和三十)年制定の「東京外国語大学附属図書館規程」によれば、学生の図書閲覧は同時に三冊まで、貸出は一冊一〇日以内となっており、現在に比べると利用上の制約は多かった。

一九六二(昭和三十七)年四月、「いままでの図書分類法には、いろいろの不備な点があったため」(「目録の案内」、一九六五年)戦前からの分類体系を全面的に改め別目録の作成を開始した。新しい分類体系では、記述言語を示す記号と主題を表す数字との組み合わせで分類するという基本的な思想は以前のものを引き継いでいるが、記述言語を示す記号を大幅に増やし、すべての言語に対応する記号を与えた。また、主題を表す数字も一〇区分であったものを日本十進分類法(NDC)に基づいた千区分に細分化し、資料の増加により効果的に対応できる体系となっている。同時に、語学書、文学書についてはNDCによらない独自の体系を使用し、本学図書館の特徴をよく表現できるように考慮されている。この分類体系はその後現在に至るまで引き続き使用されている。これに伴い、東京外国語学校

時代から一九六一（昭和三十六）年度までの図書九万八千冊余りは「旧分類図書」として以後の受入図書とは別のコレクションとして扱うことになった。

昭和四十年代に入ると各種の統計が整備・保存されているので、施設の概要はかなり正確に把握できるが、一九五四（昭和二十九）年の書庫新築時と比較して、書庫面積の増加以外には大きな変更はなかった。一九六五（昭和四十）年五月の段階で、閲覧席数二〇〇、書庫面積一、〇七二平方メートル規模になっており、書庫新築時に比べて書庫として使用する部分の面積をほぼ倍増させている。この後、大学紛争の時期をはさんで一九七九（昭和五十四）年の新図書館建設まで閲覧席に若干の減少はあるものの、大きな変動はない。また、大学紛争時については、図書館蔵書に大きな混乱はなく、図書原簿をめぐっても特に形跡は見あたらない。

この間、基本的に閉架式で運用する方法は変わっていないが、目録室に開架する図書は次第に増えており、一九六六（昭和四十一）年には参考図書のみ一、〇七三冊であったものが、一九七七（昭和五十二）年に六、〇一九冊に達している。こうした流れが、次の図書館での開架式での運用の伏線になっていった。

四 新図書館の時代

一九七五（昭和五十）年の段階で蔵書冊数は二〇万冊を数え、書庫の收容能力を上回ることになったが、教室等の一角を閲覧室、書庫として使用しているため、書庫の増設等は困難であった。このため、一九七九（昭和五十四）年、一号館中庭に独立した図書館棟を新築し、本学の附属図書館は新たな時代を迎えることになった。

新しい図書館は、一九七九（昭和五十四）年三月竣工の鉄骨鉄筋コンクリート及び鉄骨造七階建、建面積七四三平

方メートル、延面積三、八八八平方メートルの建物で、収容可能冊数約三〇万冊、閲覧席数三二五席の規模となった。そして、一九七八（昭和五十三）年度の学期終了後移転作業を行い、約三か月の準備期間において、同年六月十五日に開館した。

新図書館においては、一部資料を除き閉架式であった旧図書館と異なり、四・五・六階部分を開架閲覧室とし、全蔵書二五万冊強の内、辞書・百科辞典類のみならず、日本語図書・英語図書を中心に利用度の高い一般図書約七万冊を配架し、特に手続きなしで閲覧できるようにした。さらに、ブックデイトekション装置（無断持出防止装置）を導入することで開架閲覧室に鞆類を持ち込めるようにするなど、利用者の利便性に配慮した運営を重視している。同時に、書庫には電動式の集密書架を設置し収容力を高める工夫もしている。

電動式の集密書架は当初一階の半分を占めるだけであったが、その後蔵書の増加に伴い順次増設され、現在では一階の全部および二階の半分に設置されている。

また、開館時間を授業の開講期間は平日午後六時、土曜日は午後三時まで延長し、貸出条件も学部学生で二冊一〇日間（大学院生は五冊一か月間）とするなど、運用面でも様々な変更を行っている。

なお、開館時間は後に前・後期の定期試験期に限って平日午後八時、土曜日午後四時三十分までとした後、平成四（一九九二）年からは授業の開講期間を通じて平日午後八時、土曜日午後四時三十分までとなり現在に至っている。貸出条件についても、幾度かの細かな変更を経て、同年以降学部学生三冊二週間、大学院生一〇冊一か月に拡大され現在に至っている。

この新館建設の時期と前後して、蔵書数の伸びが急激になった。一九七五（昭和五十）年を境にすると、その前五年間で一〇万冊の増加であったのに対し、その後一五年間の増加は二〇万冊に達している。

五 コンピュータ化へ

さて、昭和五十年代以降、コンピュータの発達普及に伴い大学図書館でも業務の電算化が進んできていたが、本学でも一九九〇（平成二）年二月から図書館にコンピュータシステムを導入し電算化に乗り出した。ただ、残念ながら国立大学の附属図書館の中では最も後発の部類に入る遅い導入であった。

最初のシステムは日本ユニシス社製のU6500をホストコンピュータに端末七台の規模で導入し、また一九九四（平成六）年三月からは日立製作所製M680Hをホストとするシステムに切り替え、図書館の業務全般に適合したトータルシステムの運用を最終目標として段階的な電算化を目指した。最初は学術情報センターとの接続システムおよびそれを利用した目録データベース構築業務の一部と図書館間の文献複写・相互貸借業務から運用を開始し、システムの切り替えをはさんで図書の入札から整理、貸出、利用者用端末による目録検索にいたる予算管理以外の図書館業務のほぼ全分野にわたって電算処理を開始した。ただ、ローマンアルファベット以外の文字で記述されている言語についてはデータの作成に困難が多いこと等のために、一九九八（平成十）年の同システムの運用終了時点でも完全なデータの件数は約七万件、冊数にして八万冊強程度の規模のデータベースに留まった。また、図書館外からは検索ができない等多くの課題を残すことになった。

そこで、一九九八年三月からは、同じ日立製作所製のUNIXワークステーションをサーバーとする新システムを導入し、学内LAN・インターネットを通じて学内の研究室や学外からでも図書館の所蔵図書の日録検索が可能になった。また、同年六月にはホームページを立ち上げて図書館に関する各種の情報の公開も開始した。さらに翌九九年

三月からはA A研図書室もこのシステムに参加し、五月にはインターネット利用のための利用者用端末機器を増設するなど、建物としての図書館の枠を超えた新たな時代に入った。

六 移転を機に

新館建設以後図書館の蔵書数は毎年一万冊以上増加し続け、一九八三（昭和五十八）年に三〇万冊、一九九〇（平成二）年には四〇万冊を上回った。開架図書も一二万冊に達し閲覧席を一部撤去し書架を増設する、通常の書架を電動式の集密書架に変えるなどの対策をとったが追いつかず、一九九三（平成五）年頃からは一部の資料については段ボール箱に詰めて積んでおく状態で保存せざるを得ないものが出始めた。

幸いなことに、一九九八（平成十）年春、懸案であった府中へのキャンパス移転が本決まりになり、二〇〇〇年秋からは新しい図書館へ移ることとなった。新図書館は面積が約八割増の六、八〇〇平方メートル程度を予定し、収容冊数八〇万冊を目指して計画中である。また、電子図書館機能を重視し、時代に即した新しい形の図書館を目指している。

大学図書館は、知的情報の収集・保存を中心とした時代から、個々の業務・サービスのコンピュータ化による効率化、充実の時期を経て、インターネットをはじめとするネットワークに対応して積極的に情報を発信していく時代に入っている。こうした時代への対応を考えていくときに、折しも東京外大の独立百周年、キャンパスの移転という大きな節目の時期と重なり、新しい図書館施設・設備を持つことになったのは大きな幸運である。この機会を逃すこと

東京外国語大学附属図書館 歴代図書館長

図書館長	任期
笠井 鎮 夫	1949. 7.25-1951. 4.30
増谷 文 雄	51. 5. 1- 53. 4.30
生駒 佳 年	53. 5. 1- 55. 4.30
星 誠	55. 5. 1- 57. 4.30
蒲 生 禮 一	57. 5. 1- 59. 4.30
小嶋 武 男	59. 5. 1- 61. 4.30
佐藤 勇	61. 5. 1- 63. 4.30
安藤 一 郎	63. 5. 1- 65. 4.30
東郷 正 延	65. 5. 1- 67. 4.30
大塚 市 助	67. 5. 1- 68. 3.31
花村 哲 夫	68. 4. 1- 70. 3.31
徳永康 元	70. 4. 1- 72. 3.31
梶木 隆 一	72. 4.16- 73. 3.31
和久利 誓一	73. 4. 1- 74. 3.31
松 山 納	74. 4. 1- 76. 3.31
土井 久 弥	76. 4. 1- 78. 3.31
宮城 昇	78. 4. 1- 80. 3.31
安倍 北 夫	80. 4. 1- 82. 3.31
小野 協 一	82. 4. 1- 84. 3.31
竹林 滋	84. 4. 1- 86. 3.31
小澤 重 男	86. 4. 1- 88. 3.31
山之内 靖	88. 4. 1- 92. 3.31
二宮 宏 之	92. 4. 1- 94. 3.31
國 裕 昭	94. 4. 1- 96. 3.31
池上 岑 夫	96. 4. 1- 98. 3.31
高橋 作太郎	98. 4. 1-

なく、諸先輩から引き継いだ貴重な財産をさらに発展的に活用できる図書館を作り上げて行くことが、我々に課せられた使命である。